特別
へ13
1465
3

門へ 13
1465
巻 3

三陀羅法師誌

毎夕人未妖

一

序

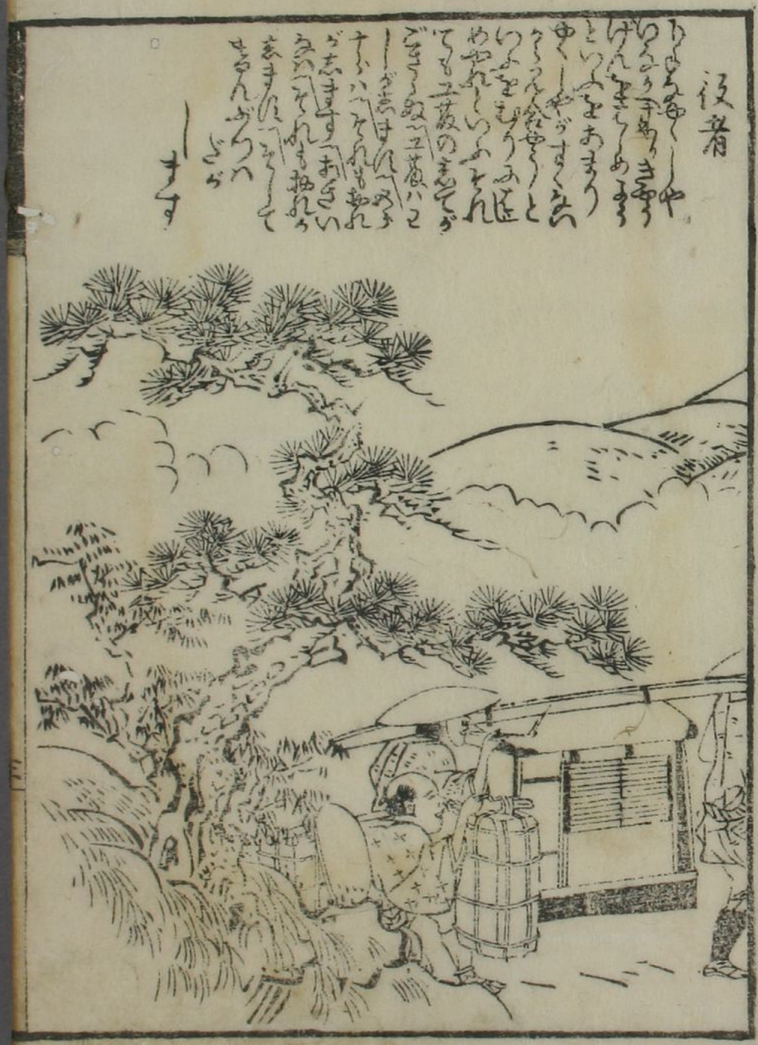
むかしくハ概古序より始りいとゞも今のぢくハ
山もゆかゞ只紫竹のかゝる口の陰、こゞが川のせんさくふ
綴亜し吉きことゝもくあくしき妻のあめ乃
市仙ともなれしくその声こゞかの巖壁よあくぬ
物くし山をうきあつめ嘯しくくひとまり風雲
一つ鉢のふ幸よなものこそれで一処堂へく

三陀羅法師誌

酒桶

上げさるものいくハ
うんでもあるひ
はきさるものハ
かこげるさまなる
じやまづいけど
しくさこのさうあけ
のたきさがあけの
まつりをくるうと
まつりてあるくが
こうわとかるじや
うんとちいものでん
みいとといハいこの
ものいはをうまま
ゝきまもい行かを
をの行のもりハ
すんとそうまで
どうびてんとふ
つうてやさがう
すめあるがぢいて
てゝそうくよす
といくいうこげる

ものをの
やうみもひ
行がある
ものう
うをを
つく男や
とうくハ
いこものの
かうもひ
行うをりれハ
きこうう
すくるーの
おみの
さがん
かまう
まこ
やひ


役者

豆腐
あるくきそでを
まんでとろ〳〵
ゆるきのまく
アとをもー〳〵
かいつこそー乃
金ぐ〳〵ぐるゑの
あぢいこれふ
ぼるぶりのハ
どぐ〳〵ぬとふ
けきを〜こいあ
のそうふすき
るるゆをあり
るのちけん
をしびてさるる
のみへとうふを
リ

入て如
けきば
けんどうふ
をくらべ
さうみえう
くふゆ〜こい
しをきこう
わそ〜ふが
いのちこと
ぬりを見つる
がうぜまい
らぬしいハ
きやぐさるを
ミます〜こい
いのちも
すてる
きぞ
ござる

可野丸
吉
可
吉
可

吉
可
吉
可

家元
こゝろいめの
さまゝ あさ
くりよふぐんの
よくふつぶと
のせこれいるト
こゝろるまる
さといぶん
ゆらくいそ
なぐこゝろん
のひさぐ
まるまりくと
まるく こゝゝ
ぶん
毒まぶ
おうへ
あさの

ちやり河

とのゝ舞ぬ
きりのこび
ちやのいろを
かめまーて
こびちやい
よいくーヤ
さのぞざう
ままーし
いつを
よのさ母
きらて
るるで
ころい
よい

自序
序文と画ふもと

新堂の主人三月
まで活ちゃれども
きさらげまを
四月六月の
ろくぐんく
さいそくすれ
ども六月
ふるりて
も七月よ
なりて
ほぐぜん
しが
ないと
ずるけ
ばるあ人
八月の比
ふんや
ふるりて
来る事
彩板

面向不背 御年玉 上中下 喜三二作

芝全交智恵之程 上下 芝全交作

日本一癡鑑 上下 好町作

自笑請合 正札附息所貝 上中下 三和作

本八文字

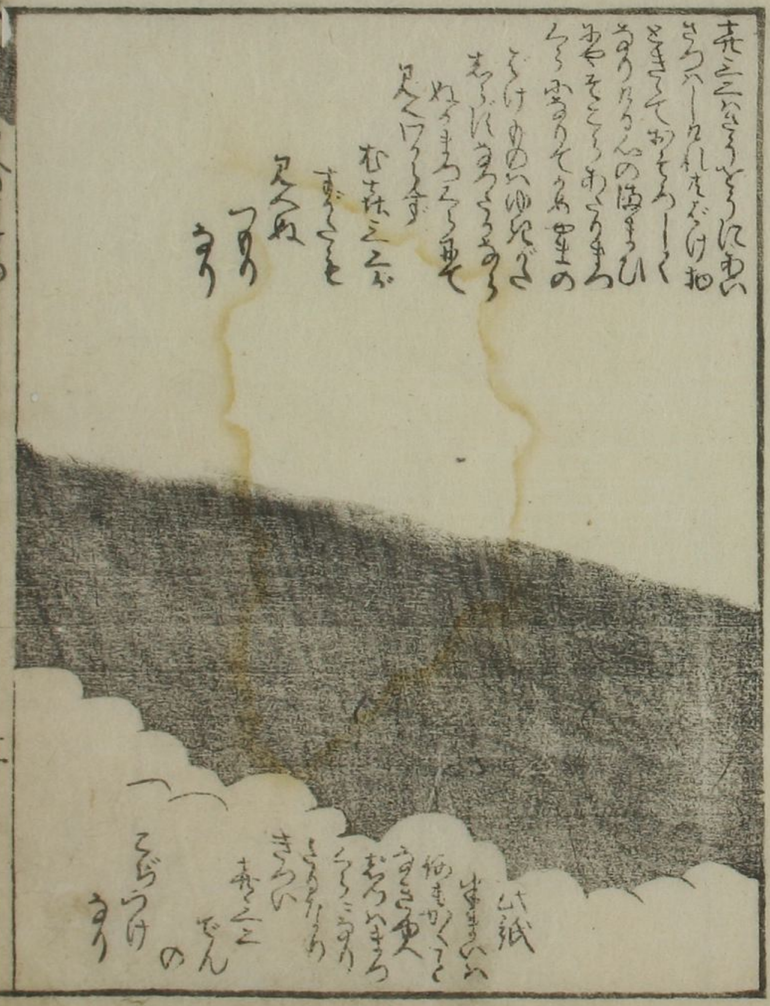
三筋緯客氣植田 上中下 京傳作

森三こんでけりのくちのこうふ
さるぐくとくこうしんぞ
んとさうじんちのぐく
ろうくれのう
森三こんの家ふ
龍山人とそちらの程ふきんのてぐくの
ぜうめちさいくんのしゝようをうく
わう

ぜうの堂うそうこうのい
でけりのくさいらんもうく
うそうでのんしんのるまのう
まうよせんやんの
ぐけ物を
うのそい
ぜうのちが明誠堂う
森三こう龍山人うと
きくもさるぐれ
そこぐ何う
わりそうるのさ

△一ハ
あし
一ツまる
ものの
ぐけ
あり
△七十の坊さまの化物
さく〜ゆく
とうとうれ
あれまり
りんぐ様へ
りうさでゆく

△ロハ〜〜の神さまで
さけこだけの
ものの
ひさてハひろを
ろハうろうさてかり
まい車かりで
うてハあろべ
ろうろべ
ろうろも
いろねうや
きんろく



とつくとと演てこしり化物ざうしの初屋
さかやうあしたまつの
時ハ丙午の年九月ハ　喜三二

おれハさきへあげるぞ

浦
岡

湖月抄

亀
亀
喜三二戯作